

# 「GSJ 筑波移転」第 5 回 渡邊頼子さんインタビュー 「組織運営の実務側から見た筑波移転」

聞き手：小松原純子<sup>1)</sup>

地質調査総合センター（以下 GSJ）の組織運営上の実務に長年関わってこられた渡邊頼子さんに、移転前の庁舎、移転前後での筑波での印象、筑波に移ってみてわかったことなどをお聞きました。

わたなべよりこ  
**渡邊頼子さん**

1975 年工業技術院地質調査所入所。産総研地質調査総合センター地質情報基盤センターアーカイブ室主幹などを経て 2017 年に退職。現在は産総研地質調査総合センター地質情報基盤センター出版室シニアスタッフ。  
(写真は 1978 年当時)

— 渡邊さんは昭和 50 年、1975 年に地質調査所に入所されましたが、移転の 4 年前ということになりますね。

そうです。もう移転が決まっています、入るときに「移転しても辞めません」という念書を書かされました。1971 年以降入所の人はみんな書かされているんじゃないでしょうか。

当時、移転が決まる前に採用された職員で、筑波には行かれないという人がけっこういたのです。移転困難だった人は都内近郊で勤められるところを探してもらって移っていったんですね。一応、東京から筑波へむりやり移転させるわけだから、移転が無理な方には対応しようということでした。あとは早期退職を募ったり。当時は公務員に定年のない時代で、研究者にもお年寄りがだいぶいました。そういう方々が筑波には行かれないということでお辞めになったので、そのぶん地質調査所だけで年間十何人も採用されています。

1975 年は筑波大も移転していたし、もう筑波移転は決まっている路線でしたけど、まだ先の話でそれほど身近な話題ではありませんでした。

— 移転前は河田町の庁舎にいらした。

河田町の庁舎（第 1 図）は昔、女子寮だったんです。目

の前が東京女子医大で、その人たちの寮だった。屋上で撮った集合写真がありますが（第 2 図）、後ろの建物に東京女子医大と書いてあるのが見えますね。この写真を撮ったのは移転の年の夏で、私はちょうど夏休みでいませんでした。移転の本番は秋だったけど、4 月と 7 月に先発隊で先に筑波に移った人たちがいたのです。誰か先に向こうへ行行って、運送屋さんから荷物を受け取らないといけないから。そんなこともあって、まだみんなそろっている夏頃に早めに写真を撮ったのかもしれない。

河田町の庁舎には、まるまるした猫みたいなネズミがいました。物品倉庫が 1 階にあったんですけど、在庫がずいぶん荒らされました。筑波に移転してきれいになって、ネズミが出なくなったのはよかったです。

— 庁舎が溝の口と河田町に分かれていたわけですが、行き来はけっこうあったのでしょうか。

採用されてしばらく企画にいましたが、そのころは月 1 回は溝の口に行っていました。あとは組合の活動がけっこうあって、大会や会議の時は朝から溝の口に行ったりしていました。溝の口庁舎がメインで、河田町は分室でしたから。

そのころ地質調査所の所長には専属の運転手が数名いて、所長の送り迎えと常便車を交代で受け持っていました。

1) 産総研 地質調査総合センター 地質情報研究部門

キーワード：河田町、溝の口、公務員宿舎、常便車、所内便



第1図 河田町庁舎正面入り口.



第2図 河田町庁舎屋上での集合写真.



た。常便車は荷物、郵便、所内便などを積んで溝の口から河田町へ行って、午後は河田町から溝の口へ戻ってくる。これを1日1回往復していたんです。人数が少なければ常便車に乗せてもらって溝の口に行くことができました。所内便も持って行ってくれました。事務に溝の口行きのカゴがあって、そこに入れておけば1日1回常便車で向こうに持って行ってくれるし、河田町宛ての書類を持ってきてくれる。今の所内便と同じです。

あとはレクリエーションとして各部対抗でソフトボール大会を開催したりしていました（第3図）。ちょうど中間ぐらいの世田谷あたりにグラウンドを借りて、朝からみんなが集まりました。溝の口庁舎の地下には床屋さんがあったんですが、そういう日には床屋のおじさんも来ていました。

### — 移転が現実的になってきたときに、生活面での不安はありましたか。

ぎりぎりまで宿舎が決まらなかったのが一番不安でした。地質調査所の他の人たちは抽選して決まっていたのに、私たち独身女性4名だけが最後まで宿舎が決まらなかったのです。職場どころか自分の引越ができないんですよ。間取りがわからないと、どういふものを準備すればいいのかもわからないし。

なぜ決まらなかったのかというと、女性用の独身寮は筑波大のそばにある1棟しかなくて、先に移転した土木研究所と筑波大の職員でもういっぱいだったのですね。でも、もう女性用独身寮は増やさないと決まっていて、移転時期の遅かった農林省の研究所と工技院（工業技術院）の人は入れなくなった。それで困ってしまって、組合にいろいろ



第3図 部対抗ソフトボール大会。

と交渉してもらいました。人事部長交渉とか、ずいぶん連れて行かれました。結局、独身寮と同じ待遇で世帯寮にルームシェア的に住むことになりました。古い宿舎で、部屋の仕切りがぜんぶ襖でした。

今はもう公務員宿舎には入れないし、だいぶ壊してしまっただけで、当時この公務員宿舎はモデル地区として全国の建築家の精鋭がいろいろな設計の宿舎を作ったそうです。公務員がこんなにたくさん一度に引っ越してくるなんてなかなかないし、土地はたくさんありますね。東京の基準よりかなり広い宿舎が、安い家賃で借りられるというのが移転前のうたい文句でした。実際は、先進的すぎて使い勝手が悪かったり、筑波の気候に合っていないくてカビがすごかったり、安い資材を使っていてすぐさびるとか、そういうトラブルもけっこうあったようです。

### — 職場の見学会には行かれましたか。

建物ができた頃と、内装ができてからの計2回見学に行きました。最初の見学会は土浦まで電車で行ってそこからバスでした。新庁舎のまわりは一面泥沼で、こんなところに行くのかとショックを受けました。2回目は東京からバスで行きました（第4図）。さすがにそのときは舗装されていましたが、建物がまだほかにあまりなくて遠くまで見えました。

新庁舎を内覧してみて、どの部屋も広くて明るくていいなと思ったけれども、当時は他の建物には入れないからそう思っただけで、移転後によその建物に行ってみたらこちらの方が明るくてオフィス的には良かったのです。地質調査所の建物は岩石試料を入れるために壁が厚く作られているんですね。それはそれでいいんだけど、廊下が暗くて、とくに夜は怖かったです。今はセンサーで電灯がつくようになっているからまだいいけれど。

### — 引越作業そのものはどうでしたか。

持って行くきれいな備品と置いていくものとは分けられて、識別のシールが貼ってあったから、あとは中身の書類だけ箱詰めすればいいということで毎日箱詰め作業をしていました。10月に移転先で業務開始だから、その前の9月頃が山でした。なぜか机が先に運び出されてしまって、床に黒電話が転がっていて、かかってきた電話を床で取っていたのを覚えています。溝の口のほうが物がたくさんあって、引越作業は大変だったんじゃないでしょうか。



第4図 2回目の新庁舎見学会。第七事業所正面玄関前。2階建てのプレハブ建屋の向こうに第二事業所の建物が見える。中央が渡邊さん。

— 実際移転してみて、職場や生活はどう変わりましたか。

庁舎が2カ所に分かれていたのが一緒になったというのが一番大きかったです。河田町庁舎は分所なので人が少なく、移転前はたまにしか溝の口の人には会いませんでした。有名な研究者にもクリスマスパーティとかでしか会わないから、どんなことをしている人なのか全然知りませんでした。それが移転後は一緒になって、直に会って連絡できるし、お給料もわざわざ溝の口まで持って行かなくてもいいし、便利になったと思いました。職員も2カ所から来ているから、当初は人数も多くて余裕がありました。

ただ、職住近接なのでいやな人はいやだったようです。宿舎も知っている人ばかりだし、町に出ても知り合いだらけじゃないですか。あと、単身赴任で来ていて一人暮らしに慣れていない人や、東京のほうから通っている人はつらかったみたいですね。

当時近所に病院があまりなくて、特に小児科は土浦まで行かなければならなかった。それから保育園がまだ少なくて、子供を保育園に入れるのが大変でした。桜村役場は当時非常に保守的で、交渉してもなかなか聞いてもらえなかったです。私は子供が生まれる直前まで保育園が決まらなかったし、預け先が見つからなくて仕事を辞めた人もいました。

— 当時の設計図を見ると、運転手控え室とか、守衛室などがあるのですが、移転後も所長車は使われていたのですか。

運転手さんは地質調査所の職員だったから、その人が定年退職するまでは所長車がありました。溝の口から一緒に引っ越してきた人は移転後もなくお辞めになって、その後機械研（機械技術研究所、現在の東事業所）の人が異動されてきて定年までいらっしゃいました。工技院内の他の研究所の運転手の人たちは、その後工技院でまとめて雇用されて、院長や理事長の運転手をしたり、所内便の配達をしていたそうです。

電話交換手という人もいました。移転当時電話は全部交換手が交換機で切り替える時代で、各所に交換手がいいたんですね。それが移転でまとまって、地質調査所も溝の口と河田町に分かれていたのがひとつになって、交換手が余ってしまった。そこで工技院全体で希望を取って、一部の人は他の業務に移ってもらったりしたようです。

守衛さんや、清掃の人も各所の職員でした。溝の口や河田町から一緒に移転してきたんですよ。皆さん定年でお辞めになって、その後そういう業務は外部委託になりました。

— これまで工技院とはいっても各所ばらばらのところにあったのが、同じ敷地内で働くようになって、どんな変

## 化がありましたか。

地質調査所で働いているだけではなくて、工技院内の他の研究所にも行くようになって、よそのことを知る機会ができました。

例えば隣の電総研（電子技術総合研究所，現在の中央第二事業所）に行くと、研究者も事務屋もみなパソコンを使っていて、びっくりしました。地質調査所はパソコンが入ってくるのが他に比べてかなり遅くて、2000年の独立行政法人化の時にやっと1人1台になったくらいだったからです。移転して一緒にならなかったら、パソコン導入はもっと遅れていたのではないのでしょうか。

各事業所で研究者の格好もずいぶん違うということもわかりました。電総研では研究者もこぎれいな服を着ていましたね。

それから、GSJではよくボーリングやトレンチの役務契約がありますが、ほかの研究所には役務契約自体があまり

ないんですね。旅費精算の件数が他に比べてとても多くて、しかも出先でレンタカーを借りたり、アルバイト料を支払ったり、集めた石を送ったりするための前途資金を持って行く必要もある。ほかの研究所の様子がわかるようになって、GSJの事務処理がほかとだいぶ違うということがわかりました。

仕事のしかたも、上意下達がしっかりしている研究所がある一方で、GSJはわりと自由です。今でも、研究者と事務屋であまり意識の違いがなくて、そういう意味では働きやすい職場だと思います。

（第1図，第3図，第4図の写真は渡邊頼子さんにご提供いただきました。）

---

KOMATSUBARA Junko (2018) GSJ's historical transfer to Tsukuba 5: From the view point of an administrative staff in GSJ.

---

（受付：2018年10月26日）